海外で所蔵の日本関係資料

研究、さらなる連携を

福岡市で人間文化研究機構シンポ

日本研究は日本に所在する資料でのみ行われるわけではない。国外流出した資料や移民の存在など、世界各地に日本に関する資料が点在している。海外の機関と連携してそれらの研究を進める人間文化研究機構（東京）は6月、九州に関連した研究プロジェクトを紹介するシンポジウム「海の向こうの日本文化」を福岡市で開いた＝写真。

同機構は現在、オランダ・ハーグ国立文書館所蔵で東インド会社の江戸初期政策を示す「平戸オランダ商館文書」、バチカン図書館所蔵で豊後臼杵藩キリシタン関係史料の「マレガ文書」、シーボルト父子が収集した日本関連の「シーボルト・コレクション」、北米日系移民の言語生活史資料の四つを柱に共同研究を進めている。それらはこれまで、現地に専門の研究者がいない、保存補修のノウハウがない、所蔵元が複数で連携が困難などの理由で死蔵に近い状態だった。共同研究の実現により、資料のデジタル化、企画展開催などの成果が出始めている。

シンポでは各共同研究の担当者が概要を紹介し、活用策や課題を議論。平戸藩史料などの研究に携わる岩崎義則九州大大学院准教授は「4代目藩主松浦鎮信の時、キリシタンの疑いをかけられ史料を隠滅してしまった。その意味でもオランダ商館文書に期待している」と語り、国際日本文化研究センターの稲賀繁美教授は「日本研究においてオランダ語は非常に重要だが、今、学ぶ人が少なくなっている。機構の4プロジェクトだけでは手が足りない」とさらなる連携を呼びかけた。（大矢和世）